

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2675 号

Parachute technique for portal vein reconstruction during pancreaticoduodenectomy with portal vein resection in patients with pancreatic head cancer

膵頭部癌に対する門脈合併切除を伴う膵頭十二指腸切除術におけるパラシュート法を用いた端々吻合による門脈再建手技に関する検討

入江 彰一 (いりえ しょういち)

博士 (医学)

論文内容の要旨

膵頭部癌は解剖学的な位置関係から門脈浸潤を受けやすく、根治切除のためには膵頭十二指腸切除術 (PD, pancreaticoduodenectomy) に加え門脈合併切除を必要とされることも多い。環状切除した門脈を再建する場合、端々吻合かグラフト間置が選択されるが、切除距離が長い場合は端々吻合では吻合部の狭窄を来しやすいと報告もある。本研究の目的は、比較的長い門脈切除距離を再建する際に、我々の行っているパラシュートテクニックを用いた端々吻合の安全性および有効性を検討するものである。2014 年 1 月から 2019 年 3 月の期間に、膵癌に対して、門脈切除を伴う PD を施行した症例において、パラシュートテクニックによって門脈再建を行った患者 15 例に対して、術後短期成績と再建門脈開存率について検討した。PV 切除長は中央値 5cm、術後合併症率 (Clavian-Dindo 分類 \geq IIIa) は 7% であった。また、術後 1 年間の再建 PV 開存率は 87% であった。門脈切除再建時のパラシュートテクニックは、自家グラフトを用いずに、比較的長い再建距離においても、安全に施行可能である。血管合併切除を伴う PD は、合併症が多く、一般的に普及していなかったが、近年では化学療法や、手術手技の進歩により、その安全性が担保され、見直され始めている。血管合併切除により、surgical margin を確保し、R0 切除が可能となり予後改善が期待できる。こういった現状において、パラシュートテクニックは、シンプルかつ安全に施行できる手技として今後使用頻度が増加してくる可能性がある。